17 巌

中村彝　　一面

明治四十二年(一九〇九)
油彩、キャンバス
五九・八×七八・八

作者の中村彝(一八八七～一九二四)は、十代後半から胸部疾患の療養のため、房総半島南部の布良や白浜にたびたび滞在している。明治四十二年(一九〇九)の夏、白浜に滞在した彝は、海岸にある岩場の一角を、穏やかな気候と風土には似つかわしくない圧倒的な存在感をもって描き出した。茶褐色の岩肌には所々に草花が生えており、厳しい環境で育まれる小さな生命を、画家の眼差しが優しく捉えていることがうかがわれる。背後に広がる水平線と、落ち着いた海面の色調が、巌の重厚さをより際立たせている。

はじめ白馬会の洋画研究所に学んだ彝は、明治四十年から太平洋画会研究所に移籍し、当時流行していた外光派の表現とは一線を画した写実的な画風を追求する。本作は第三回文展での陳列後に水戸徳川家が購入し、昭和四年(一九二九)になって皇室に献上された。巌の堅固な形態や質感表現については、親友の彫刻家・中原悌二郎から「岩は確に現実の感がある」(『彫刻の生命』)と評されている。ただし、圧迫感すらある巌の堂々たる量塊に比して、後景の海と空は存在感を弱めているきらいもあり、中原にもその点を指摘された。それでも、明治末頃の彝の風景画は現存作品が少なく、第四回文展で三等賞を受賞した《海辺の村》(一九一〇年、東京国立博物館蔵)と並び、この時期の代表作と呼ぶにふさわしい一作である。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

海と山のあいだ ―近代日本の風景描写
三の丸尚蔵館展覧会図録No.86

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社アイワード
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
令和二年七月二十三日発行

©2020, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan